

# わたしの聖戦

◎◎女性が働くところのふり◎◎73

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津江

## 壮絶な死とは何か

著名人の死が報じられると、しばらくそのニュースが流れる。現在日本では年間100万人強の人々が命を落としている。死だけは平等に訪れてくるのだから、死は日常ありふれた風景なのだが、反面身近なところでそれを経験しないと人間は死ということを忘れてしまう。

著名人が病氣などで死んだとき、よく使われるのが「壮絶」という表現だ。「壮絶な死」「壮絶な戦い」などというように。どういう意図で使われているのかわからないし、何をもって壮絶とい

っているのか疑問に思うほど、この表現は死や病氣とセットになって文字になり言葉となって発せられる。

しかし、死とは壮絶なものなのだろうか？ その言葉から連想させるように、苦しみや痛みや悶絶や苦悩ばかりが死なのだろうか？ それほど死とは悲惨な出来事なのだろうか？

そんなことを考えているときに、たまたまテレビでまさに死にゆく人の姿を描いたものを観た。ひとつはドキュメンタリーで、もうひとつはドラマであった。前者はさす

がにその直前までの映像であったが、後者は呼吸や心臓が止まり、この世の生命活動が終わりを遂げるところまで織り込んであった。

呼吸や心臓の停止を引きのばそうとする...



け、どんなケースでも呼吸や心臓の停止を引きのばそうとする現代医療のありように批判が浴びせられた。死を徹底的に拒否しようとする思いがそこには見え隠れしていたが、両者の映像は、その

ような医療とは無縁の、命の終わりの様子、短い呼吸を繰り返した後にくる安らかな終焉をとらえていたように思えた。一見、苦しげに呼吸をしている姿が痛々しいうにみえるものの、生と死の境をわたるための儀式だととらえ、

じきに静かすぎるほどの静寂な物体と化してしまえば、深い安堵を伴う感動に胸が詰まるほどである。死を忌み嫌う風潮は医療だけではない。死をまるで存在しないかのよう

ように振る舞う傾向は世界一の長寿国となった今でも根強く存在する。やたらに「壮絶」と表現し、妙に死を讃え、安易な装飾をしたがるのもその一環だろう。OECD加盟国では、日本はもっとも

長生きの国でありながら、健康に不安感を抱く国民は下から2番目に多いというデータもある。健康でないことや死をマイナスイメージばかりでとらえている国民性がうかがえる結果だ。

チベットでは、心筋梗塞や脳卒中で亡くなった人は、長く苦しむことなく召されたことから「神からのご褒美」とうらやましがられるという。一見残酷に見える鳥葬も、死者をこの世から送りだす厳粛な儀式だととらえれば、一方向からだけではない死のとらえ方に、むしろ清々しささえ覚えてしまう。

死はドラマでも物語でもない。こうやって生きていることこそが奇跡なのだと思えば、誰にでも約束された、人が帰りゆく確実な居場所なのかもしれない。

イラスト・三浦義雄